

骨転移治療の標準化を目指して

(文責：整形外科 中山富貴)

骨転移治療は多くのがんの進行期、末期の治療において重要な課題である。骨転移は個々の患者さんにとっては大きな精神的肉体的苦痛と QOL の低下を引き起こす重大な問題であるとともに、社会的にも、がん患者の増加にともない今後大きな問題となることが予想される。骨転移を生じた患者さんは一般的に余命は短く、従来の治療はEBMでなく主治医の考え方や、施設の状況によって決定される場当たりのものが多かったと思われる。このような現状を省みて、このたび骨転移治療の現状を把握し治療体系を標準化することを目指して大阪府立成人病センター整形外科の荒木信人氏を中心に厚生労働省がん研究助成金による「がんの骨転移にたいする予後予測法の確立と集学的治療法の開発班」が組織され、その研究結果の一部が「骨転移治療ハンドブック」として2004年7月金原出版から出版された。全国の医療機関の整形外科へのアンケート調査結果、一部のがん専門施設での prospective な疫学調査結果、骨腫瘍専門医、放射線科治療医による治療についての解説が盛り込まれており、各癌腫別に骨転移治療の decision tree が示されている点が特徴である。信頼できる治療研究が未だほとんどないのが現状であるため、科学的根拠に乏しく内容的には不十分ではあるものの、現段階でとりあえずのガイドラインとして使用できるものとする。各科におけるがん診療、特に肺癌、腎がん、前立腺がん、乳がんなど骨転移の多いがんの診療においては参考にさせていただけると思う。

京大病院の骨転移の診療に目を転じてみる。四肢、骨盤、脊椎の骨転移の外科的治療を担当する整形外科からみて、診断や治療方針について各診療科から整形外科に相談される症例は比較的多く、逆に初診時原発不明骨転移で整形外科を受診した患者さんの診断や治療を他科に依頼した場合も概ね親切に対応して下さっており、京大病院における骨転移に対する診療連携は概ねうまくいっているように思う。一方で整形外科としては長管骨の切迫骨折に対する予防的手術がほとんど行えていない点などが改善すべき課題かと考える。個々の症例での最適な治療法の選択は容易ではないことはいつも感じる事ではあるが、上述の研究成果などを生かし、診療科間の円滑な連携のもとに、今後はより適切で安定した治療が提供できるようになることが望まれる。